



暗殺魔法士

1

—運命の相棒—

古見蔵しか

序 僕は人を殺した

僕は初めて人を殺した……

この左手のチカラを初めて使ってそして人を殺した……

はらはらとはかなく破れた左手の封印は僕の目の前を花びらのように舞い散っていく。

そこから見えた掌は赤黒い逆三角形の魔方陣が浮き上がる。

とても——熱い！

その部分だけ焼けちぎられそうなくらいの激痛が僕の腕を走る

「貴…様っ……！」

倒れた彼は碧い瞳をカッと見開き僕を見ていた。

煌びやかな貴族の服装に豪華な羽根飾りをあしらった帽子——僕なんかよりずっと地位の高い魔血なのはわかっていた

「この……下等魔血めっ！何を……しやがった……っ」

彼は苦しそうに胸を押さえながら、かすれた声で僕を罵った。

何もしてない。何もしてないんだ——そう信じたいけど、僕の眠ってた左手は彼の胸に触れた瞬間覚醒した。

そうならばどうなるか……僕だって馬鹿じゃない。おじいちゃんから毎回聞かされてきたんだ。

我が家系に受け継がれた【死の血】のチカラを……

「く……がああっ!!」

彼は苦しみに耐えかね声にならない咆吼を挙げた。

搔き毟った胸は爪に傷つけられ白いシャツの上から血が滲む。

彼も僕と同じように胸に激痛を覚えている。

それは僕の痛みの何千倍も酷くそれは自らの【死】を感じさせるほどなのであろう。

「死にたく……ない……死に……たく……ないよ……」

紫色の唇で彼はひたすら同じ台詞を口にした

だんだん彼の血相は赤から白へとかわりそして土になった。

あれほど胸に力を入れて搔き毟っていた手が地面に転がった。

彼は壮絶な表情を浮かべたまま僕の目の前で絶命した。

彼の命がついた瞬間僕の左手の魔方陣も同じように熱を引いていった

それは彼の命を食べ尽くして満足したかのように静かな眠りについたのであった

どうしよう……

僕は地面にへたり込んだままだ頭を抱えるしか出来なかった

だけどそんなことしている場合じゃなかった

ぽうっライティングと魔法球の明かりが数個近づいてくる

そして遠くの方で「ぼっちゃんっ！」と彼を呼ぶ声も聞こえる

逃げよう——

僕は震える脚をパンと叩き立ち上がると踵を返し森の中へと走り出した

僕は初めて人を殺した……

その事実から逃れるかのように僕は闇の中を疾走する

けど——それは絶対に逃れることの出来ない宿命の予兆にしか過ぎなかったのだ。

1 絶対零度の男

魔法帝国帝都の東、魔血貴族たちのいこいの場として知られるノーフォークの森

普段は平和で乗馬や狩猟で賑わうきれいな場所であるが今日だけは雰囲気違っていた。

晩秋深まる朝、【水】の有力魔血貴族オーギュスト・ベアールの息子レオハルト・ベアールは変わり果てた姿で見つかった。

それは瞬く間に魔血貴族社会に伝わる。

なにせ最大属性派閥【水】の筆頭ベアール家の一大事。それを『暗殺』と捉える者も少なからず居るはずだ。

もちろんベアール家の人々はすぐにレオハルトの死を他殺だと判断した。

『坊ちゃんが殺された』

『ついに暗殺者が我が家に牙をむいた』

森を歩きゆくベアール家の人々は口々にそう嘆いている。

彼はそんな人々を横目で追い抜きながら落ち葉で敷き詰められた地面を踏み歩いた

ひらひらと舞うのはどんよりとした晩秋の空を引き裂くような空色のマントコート

その厳冬のような冷たさと鋭さを兼ねそろえた姿に、悲しみと怒りにくれるベアール家の人々ははっと息を呑む。

ある人は恐れおののき、ある人は丁重に礼をする。そしてある人は彼のことをこう呼んだ。

「絶対零度の男だ——」

それは【水】の魔血の中でもずば抜けた魔力を誇り、年若くして帝国軍魔法騎士団の団長を任された天才魔法剣士。

またの名を絶対零度のイスラーク・ジェラルー——

「ジェラルール大佐っ！ お待ちしておりましたぞ！」

異彩を放つ彼を迎えたのは殺されたレオハルトの父オーギュスト・ベアール。

まるで卵から手足が生えたような体型に毛皮のコートを羽織り、手には無駄に派手な指輪がごつごつとはめていた

「お忙しい中まさかあなた自ら息子の死を悼みに着てくれるとは……このオーギュスト感激で涙が……」

「勘違いしないでほしいな」

イスラークは一言そう釘を刺すと目上の相手のはずのオーギュストをじろりと睨み付けた

その瞳は緑と青の異彩の光——イスラークの瞳は魔血には非常に珍しいオッドアイだった。

「僕はあなたの息子さんの死因をサドウ卿の命で調べに来ただけ。それ以上の意味はない」

「サドウ卿……ですか」

その一言にオーギュストは緊張した面持ちを示した

オアネス・サドウ——最大属性派閥【水】のトップに君臨する宗主と呼ばれる男。

その男が【水】——否、全魔血の中で最強の魔法剣士をよこすくらいなのだから、レオハルトの死を重く受け取ってるに違いない

オーギュストにはそう判断するしか出来なかった。

「で……息子さんは何のトラブルに巻き込まれたの？」

イスラークはまるで表情のない機械のように淡々とした口調でオーギュストに聞いた

「いえ……まあトラブルという様なトラブルではないんですが……」

そう言うとオーギュストはイスラークの機嫌を取るかのような急ごしらえの作り笑顔を浮かべた。

「レオハルトもやんちゃで強気な奴でして……目が合う気に入らない者は魔血であれ非魔血であれ喧嘩をふっかけてしまう困った奴で……」

「ふうん。つまりそういう遺恨で殺されたと？」

「ええ、そう言えば昨日……この近くのディアルグレイ墓地でもいざこぎを起こしていた記憶があります」

「ふうん……」

そう言うとイスラーグは落ち葉が敷き詰められた地面をギュッと踏みしめ止まった。

目の前には横にも縦にも大きい魔血貴族の死体が落ち葉の上にごろりと転がっている

随分苦しんだのだろう……彼の顔は死後も苦悶に満ち未だに楽になっていないかのように見えた。

「可哀想に……こんな苦しい顔をして」

そんな息子の亡骸を前にしてオーギュストは金色のハンカチで涙を拭いた

「ジェラルド大佐っ！ 絶対に犯人を捕まえて——否、犯人を八つ裂きにして私に見せてください！ そうじゃないと私の怒りは収まるはずが——」

オーギュストはそう言ってイスラーグに泣きつこうとしたがもう彼の姿はそこにはない。

イスラーグは一人レオハルトの遺体に近づきそして空色のマントコートを翻しその場にしゃがみ込んだ。

随分きれいな遺体だった。

殺されたのなら刺傷やら魔法傷やら何かしらの傷が残るはず

だがレオハルトの遺体は胸に自分で付けた小さな傷くらいしか確認できなかった

「見た目だけだと、外傷ゼロか……」

だがイスラークはあるところに注目した。

それは生前のレオハルトが苦しみの上必死に傷つけた胸の傷。

まるでレオハルトが最後に残したダイニングメッセージのようなその傷にイスラークは興味を引かれた。

「ジェラルド大佐……っ！ 何を——！」

次の瞬間イスラークのした行動にオーギュストは絶句した。

イスラークは人差し指をすっと立てるとその先端がみるみるうちに小さくも鋭い氷の刃に変貌した

そしてその氷の刃を使ってレオハルトの遺体の衣服を引き裂き始めたのであった

「おやめくださいっ！ 死して息子に裸になれなど——っ!!」

「静かにしてくれないかな」

イスラークはそう言うと一度だけオーギュストを緑と青の瞳で睨み付ける

その一言だけでぴたっと黙り込んだオーギュストも確認せず、イスラークはレオハルトのはだけたシャツの間に覗くある標しを凝視した。

「これは……」

肌に食い込んだように赤黒く変色した魔方陣だった。

それは逆三角形を模しており、魔方陣は見慣れない マジックスペル 魔文字 で埋め尽くされていた。

「これは……何なのでしょう？ ジェラルド大佐……」

見慣れない魔方陣を前にしてオーギュストは思わず頭をひねった。

「見てわからない？ これがあなたの息子さんを死に追いやった魔法傷だよ？」

「魔法傷!? これが？」

そう言うとオーギュストはもう一度レオハルトの胸に刻まれた魔方陣をまざまざと眺めた。

「いや、しかしだね、ジェラルド大佐。魔法傷というのは広範囲にわたっての火傷や凍傷を言うんじゃないのかね？ こんな小さな魔方陣でどうやって我がベアール家みたいな高潔な魔血貴族の命を奪えるのかね？」

「さあ……ベアール家の皆さんがどれだけ魔力が強いかわからないけど……」

イスラークは少し蔑んだ瞳でオーギュストを見ると更に言葉を続けた

「この魔方陣はかなり強力な魔法の跡。今確認されている主な属性【火】【水】【風】【土】【雷】が残す魔法傷すべてに当てはまらないもの。まあ今わかるのは……犯人は魔血だとしか言えないね」

「何っ！同族である魔血の仕業だとっ！」

オーギュストはそう言うとすつくと立ち上がりイスラークを睨み付けた。

「ならば我らと対立する【火】が暗殺者を我が一族に放ったということかっ！ おのれえーっ！
【火】の奴らめえー！」

怒りに燃えたオーギュストだったがふと我に返った瞬間疑問が湧いた。

「いや待てよ……犯人の使い手は正体不明の魔血——それを【火】の奴らが操っているとしたら、それは暗殺者じゃない。暗殺魔法士……!!」

オーギュストはハツとした。そしてそれをイスラークに問いただそうとしたその時だった

イスラークは急にその場から立ち上がりバサッとマントコートを翻しその場を去ろうとしたのだ。

「ジェラルド大佐。どこへ……っ！」

オーギュストは焦ったようにイスラークを引き留めようとするが、彼の歩みは止まることなく逆に早まった。

「僕の仕事はこれで終わりだ。あとはサドウ卿に報告するだけだよ」

「そんな……ということは犯人がわかったのですか？」

その一言にイスラークは氷のような表情の口元に初めて笑みを浮かべた。

だが、それは愚かなオーギュスト・ベアールのために浮かべた笑みではない。

自分の——自らの欲望が満たされた悦びの笑みだった。

——使える。あの魔方陣、使える！

イスラークのクールな心は久々に高く躍っていた。

なにせ一五年ぶりに【死の魔方陣】と言う最強の『武器』にお目にかかったのだから……

2 【水】の宗主

【水】の宗主オアネス・サドウは不安であった。

ここ最近、近しい魔血貴族たちが次々と暗殺にあっていく

そして今日は自らの右腕オーギュスト・ベアールの息子が謎の死を遂げた――

それを聞いただけでサドウ卿は自らの屋敷の警備を二倍に増やした。

――絶対にこれは【火】の陰謀に違いない。

屋敷の広大な庭をうろうろする衛兵たちを窓から眺めながらサドウ卿は何度もそれを心の中に刻んだ

【水】と【火】――自然界でも相容れない関係のその二つは魔血の属性でも長年の仇敵同士だった。

時はさかのぼること500年前。魔法帝国の影も形もない時代から【水の国】と【火の国】は絶えず戦争を繰り返す間だった

200年前、魔血集合国家として『魔法帝国』が建国されても属性派閥として残った【水】と【火】は血で血を洗う権力闘争を繰り返してきた。

そして今、その軋轢は臨界点を迎えようとしている。

最大属性派閥【水】の宗主オアネス・サドウは今ある人物と熾烈な権力闘争を宮廷内で繰り返している

それが【火】の宗主にして先の大戦で英雄的活躍を治めた別名『烈火の剣聖』ケンヴィード・セラフ・ティアマート。

自分より若くて強いリーダーの台頭にサドウ卿は焦っていた。

このままでは数で勝る【水】よりカリスマ性のあるリーダーのいる【火】が勢いづくのではないだろうか？

それを危惧しサドウ卿は沢山の暗殺者をティアマート卿周辺に放った。

そして、いまそれをティアマート卿側からやり返されている気がしてならなかったのだ

「おのれ……烈火の剣聖め……」

サドウ卿は窓の外の衛兵たちを険しい表情で眺めながらぎゅっと手を握りしめた

唇を強く噛み、瞳をぎよろりとさせ、その表情には強い憎しみが露わになっていた。

その時だった。

サドウ卿の執務室のドアがこんこんとノックされる。

サドウ卿はすぐに憎しみの顔を封印すると、いつものように流水のように冷静な表情で振り返った

「……入れ」

その一言にドアはギイッと開く

出てきたのはスラッとした舞台俳優のようなたたずまいに帝国軍の白い軍服を身に纏った青年将校。

限りなく白に近い短めの銀髪に赤メッシュという特異な髪型に瞳もこれまた稀な緑と青のオッドアイ――

「イスラークか……」

彼――イスラーク・ジェラルルの姿を見た瞬間サドウ卿は急に安堵のため息をついた

「ちょうど良かったベアールの息子の件に関してお前に聞きたいのだが……」

「それならもう調べましたよ」

そう言うとイスラークは一枚のメモをサドウ卿に手渡した

そこに書かれていたのは逆三角形を模した見慣れない魔方陣だった。

「これは……なんだね？」

その問いにイスラークは氷のような冷たい表情で淡々と話し出した

「太古の昔魔血の祖となった8人の賢者がいた。彼らはそれぞれ【火】【水】【風】【土】【雷】【光】【時】【死】のチカラを持っていた。だが時が経つにつれ賢者の子孫、すなわち我々魔血たちは属性に別れ争うようになり、その末に血が絶え滅びた魔血いる事実がある——」

「おいおい、イスラーク。わしは昔話など聞きたくはないぞ……」

呆れた表情のサドウ卿に対しイスラークは話を中断させるなど手を刺しだしながらサドウ卿にあることを質問した

「サドウ卿。今我が帝国にいる魔血の種類を教えてください」

「魔血の種類……属性か……」

そう言うとサドウ卿は訝しげな表情を浮かべながら顎髭を触った。

「まず基本的な属性派閥【水】【火】【風】【土】、それから皇帝家が属する【雷】最後にイデアス聖教教皇しか受け継いでないと言われる【光】——他は見たことも聞いたこともないな」

「そう、【時】そして【死】の魔血は歴史の中に葬られたはずだった。本当なら……ね」

「おい、イスラーク。そろそろ勿体ぶらずに確信を話せ」

サドウ卿は苛ついた声でイスラークにそう言い放つ。

イスラークはそのまま不敵な笑みを浮かべサドウ卿の持つ魔方陣の描かれたメモを指さした。

「サドウ卿。これは^{デスサークル}【死の魔方陣】と呼ばれるものです」

「【死】だと……？」

その言葉にサドウ卿はぎよっとした様子でイスラークを見た

「ちょっと待て、イスラーク。【死】の血は絶えたと言ったではないか……」

「いえ……【死】の血は我々の知らない間にひっそりと生きていたのですよ」

「ほう……」

サドウ卿はそう言うと執務椅子に座りメモに書かれた魔方陣を眺めた

「ではベアールの息子を殺したのは【死】の血の魔血ということかな？」

「ええ……それは間違いないでしょう」

「うぬぬ、【火】の奴らめ……厄介な暗殺魔法士を探し当てて手懐けたものじゃ……」

その一言を聞いてイスラーグは何か反応したようにサドウ卿を緑と青の瞳で見た

「サドウ卿。これを【火】の仕業だとお考えで？」

「そうに決まっておるであろうが……最近の情勢がわからんのか？」

「いえ……そう考えるのは普通ですが」

そう言うとイスラーグは深いため息をついて窓の向こうの厳重な警備が敷かれたサドウ卿の庭を窓から眺めた。

「この事件はあなたがピリピリするような事件ではありませんよ。だから安心してよろしいかと……」

「何を言う。わしの右腕のベアールがやられたんだぞ。ピリピリしないわけがないであろうっ！」

その一言にイスラーグは冷たく微笑んだ。そしてサドウ卿の持っていた魔方陣のメモをピッと取り返した

「サドウ卿。ティアマート卿はそんな卑怯なことをする男ではありませんよ」

その一言にサドウ卿は懐疑的な表情を浮かべた。

イスラーグはそれを解消させるためもう一度優しげな笑みを浮かべ言った

「あの人は僕の元上司ですよ。あの人を間近で見てきた僕の言うことを信じないのですか？」

だがその一言にもサドウ卿の不信感はぬぐえぬものだった。

「イスラーグ。お前が奴をどう思おうが自由だが【水】と【火】の対立関係はもはや臨界寸前じや……」

「いけませんね。サドウ卿。この事件を【水】と【火】の対立と混同してはなりませんよ」

その言葉にサドウ卿は腑に落ちない表情を浮かべイスラーグを見上げた。

彼は不敵な笑みを浮かべ言った。

「事件はとてつもなく突発的に起きたもの。暗殺魔法士でも何でもない、ただの素人の仕業です」

「ただの……素人？」

「馬鹿な【死】の血です。隠れておけばいいものの、こんな形で僕の目の前に現れて——」

そう言うとイスラーグは何が面白いのか声を出して笑い出した。

そんなイスラーグをサドウ卿はきよとんとした表情で見上げるばかりだった。

「サドウ卿」

その瞬間、イスラーグはキッと凜々しい表情でサドウ卿をまっすぐ見つめた

その鬼気迫る緑と青の瞳に見つめられサドウ卿は何も声を発することが出来なかった。

「この事件の犯人を僕に預けてくれませんか？」

「何……ベアールを殺した犯人を……預けるだと？」

「ええ……このまま捕まって死刑台に送るには非常に惜しい人材ですからね」

そう言うとイスラークはニヤッと笑みを浮かべた

その一言でサドウ卿はイスラークが何を言いたいかわかったような気がした。

「暗殺魔法士か……」

サドウ卿は震える唇で一言そう言った。

その一言にイスラークは肯定するような笑みを浮かべサドウ卿を見た

「彼は僕にとって、そしてあなたにとっても最強の武器になる——これほど美味し話はないですよ。むしろベアールの息子が彼によって殺されてよかったですよ」

その言葉を言ってイスラークは少し言いすぎたかなと思ったのか一つ咳払いしてサドウ卿の前から一歩引いた

だがサドウ卿はそれ以上追求せず力が抜けたように深いため息をついた

「しかし……イスラーク。ベアール家の者どもをどうするつもりじゃ……奴ら嫡子を殺され憤っておると聞いたぞ」

「ああ……そのことですか」

そう言うとイスラークはサドウ卿の方を振り返るともう一つ不敵な笑みを浮かべた。

「それならもう手は打っておりますよ。もう一人の暗殺魔法士が今頃ちゃんと仕事をしてきているはず」

3 墓守の少年

秋の墓地はとにかく落ち葉が溜まる。だから、箒を欠かさずかけるように――

彼は祖父の教えを反復しながら、広大な墓地に溜まった落ち葉をひとり竹箒で掃き取っていった

ここは帝都の東の外れ。ノーフォークの森の真ん中にあるディアルグレイ墓地。

代々魔血専用の墓園として受け継がれ、今では戦争に没した無名戦士の墓から有名魔血貴族の代々墓までかなりの広さを誇っている。

その墓一つ一つに箒をかけ落ち葉を払っている少年がいた。

「お墓がきれいになれば残された人もそこに眠る人も幸せになる……と」

そう言いながら丁寧に墓の上から落ち葉を払うのは真っ赤なぼさぼさ頭に金色の瞳の少年――

この墓地の代々管理を任されている下級魔血ディアルグレイ家の跡取り息子ザガロ・ディアルグレイだった。

「よーし。これで大分綺麗になったぞ！」

ザガロは墓石に溜まっていた落ち葉を掃きとると掃除道具を持って移動し始める

時は秋――森の木々は色づいた葉を落とし墓地はさながら落ち葉の絨毯に彩られていた。

そんな何層にも敷き詰められた落ち葉をゆっくり踏みしめながらザガロはふと自分の左の掌をじっと見つめた

新しく封印のバンテージがきつく巻かれた左手――

もうそこには昨日のような強い熱を帯びた痛みは感じない。

「何だったのだろう。昨日の痛みは――」

その瞬間、ザガロの脳裏に昨日の彼の死に様がかくつきりと過ぎる。

ザガロは脚の下からぞわぞわと恐怖が湧いてくる感覚に陥った。

思い出したくもない忌々しい出来事だ。

僕が人を殺した。この封印されし左手のチカラで人を殺した

それは紛れもない事実としてザガロの心を恐怖で縛り上げ続けていた

次の瞬間——

バサバサとカラスたちが一斉に木から飛び立っていく

ザガロははっと後ろを振り返った。

墓地に響くのはただガアガアと不吉なカラスたちの啼き声のみ。そのほかの音は一切しない——

ザガロは思わず胸を撫で下ろした。

追っ手が来ていたらどうしよう——そのことばかり頭を過ぎる。

殺してしまったのはかなり地位の高い魔血の嫡子——それだけはわかっていたから覚悟は出来ているつもりだった。

だけどいざその時になれば僕はどうなるのだろう。

僕のことを唯一心配してくれる祖父はどう思うだろう——

——もう、やめよう。

ザガロは迫り来る恐怖から目をそらすかのように平常心で日常の仕事を淡々とこなした

カアカアとカラスたちは相変わらず騒がしい。

ザガロは当てにならないカラスたちをじろりと睨み付け再び墓石に積もった落ち葉を払いのける作業に入った。

その時——静寂が包む墓地にまた異質な音が響き渡る。

それは馬の鳴き声だった。

ザガロはもう一度ハッとその方向を凝視した。

まさか追っ手か——と思ったけど、そこにいたのは馬から下りた一人の少女だった。

なんだ、脅かさないでくれよ——ザガロは心底安堵したが、だが彼はその少女から目が離せないでいた。

墓参りに来たと思われる魔血の少女は供一人も連れてきてはいなかったのだ。

なんて不用心なんだろう——どんなに魔血専門の墓園とは言えここが人気のない墓地なのは紛れもない事実だ

それを承知の上で彼女はたった一人で参りに来た。

ザガロはどんどん近づいてくる彼女を箒を持ったまま息を呑んで見つめた

その格好はそれほど豪奢ではない。タイトなボディスーツに巻きスカートをあしらった動きやすい服装とでも言ったら良いのだろうか

だがりボンでまとめられたさらさらの栗色の髪に至る所に光るアクセサリを見ると相当身分の高い魔血令嬢ではないかとザガロは予想した。

それに——彼女の巻きスカートの横には細身の刃のない剣がぶら下がっている。

魔剣——魔血が好んで使う魔法の刃を出して使う剣だった。

——この子、女の子なのに魔剣を使うのか？

ザガロはさらに彼女を興味深く凝視する。

すごい魔血令嬢で墓場に一人で来てしかも魔剣の使い手の少女——これだけでもどう考えてもただ者ではない

だが、ザガロのあまりの熱視線はやがて彼女に悟られてしまうほどだった。

彼女はこちらの視線に気づくと訝しげな表情を浮かべながら向きを変えこちらへと歩んでくる

やばい——ザガロは彼女と視線があったその瞬間、目をそらし余所余所しく箒を掃きだしたがもう遅かった。

「ねえ？ 私に何か用なの？」

彼女はザガロの目の前に立つと一言強い口調でそう言い放った。

どう考えても年上の自分を見ても臆する様子のない彼女の姿を見てザガロは更に彼女が不思議に思えた

「君。僕が怖くないの？」

「え？」

「だってここ墓地だよ。君ぐらいの魔血令嬢なら供の一人や二人連れてきても——」

ザガロのその一言に彼女はムツとした表情を浮かべ更に聞き返した

「乙女が一人でお墓参りに来ちゃまずかった？」

「そんなことはないけど……」

その切り返しにザガロは困ったように言いよどむ

それを見て彼女は更に強気になってザガロの顔をのぞき込んで言った

「あなた……ここの墓守でしょ」

「うん」

「全然怖くも何ともないわね。あなた弱そうだし」

弱いって——その一言にザガロは思わずムツとした。

封印している魔法はともかく、戦えるだけの体術はマスターしているし、これでも身体は鍛え

ている方だ。

「やだなあ。本気で怒っちゃった？」

彼女はそう言うと不機嫌になったザガ口をあやすようににこっと笑みを浮かべた

その表情はとてもキュートで惹かれるものだった。

「……別に」

ザガ口はそれを隠そうと顔を紅潮させ下を俯いた

「まあいいや、じゃあ私用事あるから」

そう言うと彼女は栗色の長い髪を揺らすと墓場の奥へと歩いて行こうとした。

それに対しザガ口はそれを制止させるように一言声をかけた

「待って。用事って墓参り？」

「^{ここ}墓場に来てそれ以外の用事の何があるの？」

「まあ、そうだけど……」

「もう……まどろっこしい奴ね」

そう言うと彼女はまた落ち葉を踏みしめ歩き出した

ザガ口は再び墓掃除の続きをしようとしたがそんな彼女のことが気になって仕方がなかった。

彼女が向かった先は一つの大きな墓石――

そこはまだ真新しい花や供え物がたくさん供えられていた。

――【火】の有名魔血貴族カルデローネ家の墓石か……

それはよく覚えている。最近の話だ。カルデローネ家で凄惨な暗殺事件が起きたと――

確かそれはたった一人の暗殺者によってなされた惨劇だった。

否、非魔血の暗殺者が有名魔血貴族を一人で殺^やれるわけがないからその正体は暗殺魔法士だったのかもしれない。

どちらにしろザガロの記憶に強く残っているその惨劇とその後の悲痛な葬儀。

だけど葬儀が終われば他の魔血貴族たちは自分の防衛を真っ先に考え暗殺に死したもののことを忘れてしまう

つい最近に葬儀が終えたばかりのカルデローネ家も今では墓参りする者は皆無に等しかった。

だけど——この少女は誰も参ることのなくなったこの墓を訪れている

亡くなった人はそれほどまでに特別な存在だったのだろうか——その熱心さは遠目で見ているザガロも心が打たれるほどだった

気になる——

ザガロはそう思った瞬間、脚が自然と彼女の方向へと向いた。

彼女は必死で祈っていた。

死した者の安穩か、それとも生き残った者の平穩か——その祈りの姿は先ほどの高圧的な態度とは違いとても高潔に見えた。

「——どうしたの？」

彼女は近づいてきたザガロに気づいて祈りをやめた

その背中はどこか怒りの表情に帯びていた。

「いや……」

そう言うとザガロは少し緊張の面持ちで彼女に聞いた

「どうしてそんなに祈ってるのかなって？」

「墓場で祈りを捧げるのがそんなに珍しい」

「そうじゃないけど……」

そう言うとザガロは困ったように頬を指で掻いた。

彼女は初めてこちらを振り返って一つため息をついた。そして真剣な顔をしてザガロを見た。

「みんな他人のことなんてどうでも良くて自分さえ良ければいいって世の中だもんね。葬儀の後に墓参りする者なんて珍しく感じるのかもしれないね」

「……」

「いいの。変わり者だって思って貰って結構よ。それでも私は私だもん」

そう言うと彼女は長い栗色の髪を掻き分けるともう一度カルデローネ家の墓標を眺めた

「ねえ、あなたは知ってるでしょう。この墓の主がどうして亡くなったか——」

「え……うん……」

ザガロはそれが暗殺だったとは口に出して言うことが何故か出来なかった

それほど彼女の背中は怒りに満ちあふれており、近寄りがたかったのだ

「言わなくてもわかるわよ。そう、暗殺よ。私のお父様の部下だったヴィエリ・カルデローネ子爵が殺されたのよ。暗殺者にね」

そう言うと彼女はもう一度十字を切り墓標に祈りを捧げる。

そしてその怒りで震える唇から出た言葉は何よりも重い言葉だった。

「私、カルデローネ子爵の娘さんと友達だったの。だけど彼女の父は暗殺され、母はそれを追って服毒自殺——彼女も精神を病んで今は療養暮らしよ」

「そうなんだ……」

ザガロは深刻な顔をして彼女を見た

その瞬間彼女は祈りを結んでいた手をギュッと拳を握りしめた

「私は暗殺者を絶対に許さない……」

その一言にザガロはドキっとした。

彼女のにじみ出す怒りはその瞬間頂点を極めたような気がした。

「何の罪のない家族を崩壊させどん底に追い込んだ卑怯で狡猾な暗殺者が憎くて仕方がない。出来れば私の手で裁きを下したいくらいよ」

その言葉にザガロは何も声をかけることが出来なかった

彼女の呪いの言葉の後しばらく沈黙が続く秋が深まる墓地。

しばらくして彼女の怒りの糸はピンと切れた。そして先ほど同じ涼やかな表情を浮かべもう一度ザガロの方を振り返った。

「ちょっとおしゃべりが過ぎたわね」

彼女は一言そう言うとクスッと笑った。

そしてザガロの方をその青い瞳でもう一度まっすぐ見ると一言言った。

「私の名前はアイリス——アイリス・ラキア・ティアマートよ」

そう言うと彼女はまた颯爽とした様子でその場を去っていく

その姿を呆然と見つめながらザガロはただただ彼女の名を復唱するしかなかった。

「アイリス——アイリス・ラキア・ティアマート……って、あの娘ティアマート家のご令嬢だったのか！」

それに気づいたときはもうアイリスの姿はもうどこにもない

風のように彼女は去っていったのだ。

——とんでもない相手と馴れ馴れしく会話したものだ。

ティアマート家——【火】の宗主を代々務め、その血の系図は魔法帝国が形成される前五国時代の【火】の国の王家にたどり着くとされる最も高貴で強力な魔血貴族

しかも、彼女の父親はおそらくケンヴィード・セラフ・ティアマート——これも魔法帝国では知らない者の居ない、国の英雄『烈火の剣聖』？

とんでもない大物じゃないか。

ザガロはそれを知った今頃になってちょっとした武者震いを覚えた。

多分それを気づかなかったのは彼女が高貴な生まれのそぶりも見せず偉ぶらなかったから——

そうじゃなければ声さえもかけられない間柄だ。

アイリスが去り再び静かになったディアルグレイ墓地。

ひゅううっと秋の冷たい風がザガロの肌を刺激する。

そろそろ日が暮れるな——ザガロは箒で落ち葉を掃くのをやめふと不穏な天気のを眺めた。

やっぱり相変わらずカラスはうるさい。ガアガアと懲りずに啼いている。

今日の仕事はこれで終わりにしようとしたその時だった。

「ザガロ——」

名を呼ばれザガロはハッとそちらを振り返った。

そこには全身に魔方陣をかたどった入れ墨のようなアザが浮かんだ一人の杖を持った老人が立っていた。

彼の姿を見てザガロは張り詰めた気持ちを緩めて笑った。

「おじいちゃん」

祖父ザックの姿を前にしてザガロは初めて嬉しそうな表情を浮かべた。

ザガロにとってザックは祖父である前に、厳格な父親でもあり、優しい母でもあった。

ザガロは両親の姿を知らなかった。物心ついた頃には父も母も存在せず、そこには一人祖父ザックが存在していた。

だけどザガロはそれを寂しいとは思わなかった。

それだけザガロにとってザックの存在と愛は巨大だった。

自分を悲しませないように難役もこなすザックを尊敬していたし心から愛していた。

「ザガロ。もうすぐ日が暮れるぞ。早く家に戻るように——」

「うん——」

その瞬間ザガロは暗い表情で俯いた。

彼の頭に再び昨日の惨劇が蘇る。

【死】に苦しむ彼。彼の命を吸い取った左手の痛み——すべてが今まで以上に鮮明に彼の頭の中を駆け巡った

ザガロはバンテージの巻かれた左手をギュッと握りしめた。

だが、孫のそんな小さな異変もザックは見逃すことはなかった

「ザガロ……後で話がある」

ザックは杖を突きながら彼に背を向けるとそう言った。

その背中にはなにか強い威圧感を感じるほどだった。

「話……って？」

ザガロはそんなザックの背中に怯えながら恐る恐る一言聞いた

それに対しザックは彼の方を振り返りニッコリ笑った。

「お前に眠るチカラの話だよ」

ザックの一言にザガロは思わず鳥肌を立てた

おじいちゃんはすべて知っている——

不自由な足を引きずりながら去っていくザックの姿を呆然と見つめながらザガロはただただ昨日の愚行を懺悔するしかなかった。

ザガロは恐れていた。この出来事が自分たちの平穏な日常を壊すのではないか——

自分を必死で育ててきた祖父を不幸のどん底に陥れるのではないか——

——いやだ！

「待って！ おじいちゃん！」

ザガロは持っていた箒を投げ出すとザックの後を追う

あれほど迷っていた彼は祖父にすべてを打ち明ける覚悟が自然に出来ていた

だけど、それはもはやもう手遅れだったのかもしれない

ザガロの感知しないところでそれは水面下に動き始めていた。

暗殺魔法士はじっとザガロを見つめていた

ディアルグレイ墓地の端の森、一本のケヤキの木の上に彼は息を潜めて赤髪の少年ザガロの姿を真紅の瞳で追っていた

サワサワと不穏な風がディアルグレイ墓地を駆け抜けていく。

その風に乗る彼の軟らかい黒髪も宙を泳ぐ。

まるで森に棲む黒い魔獣のような彼はこれからザガロが襲われる悲劇のすべてを知っていた。

だがそんなこと関係などない――

彼は彼の仕事をすることしか頭がなかった。

ザガロが彼の視界から離れて消えていくのと同時に彼はいち早くこの墓地に訪れた新たなる異変に気づいた

まるで悲鳴のような馬の鳴き声に地響きのような蹄の音。

そしてそれと同時に落ち葉をかき乱すブーツの音――

数はかなり多い。十人は確実にいるであろうか。

ベアール家はどうやら犯人拘束に本気らしい。相手は少年と老人だけだというのに。

否、そう思って油断してたら怪我をする。なにせ彼らには封印されし【死】の血が存在するのだから――

彼は黒い肌に浮かぶ口に小さな笑みを浮かべた。

そして彼の姿はすっと森の闇の中へと消えていく。

彼にはわかっていた。ザガロ・ディアルグレイが生きて行くには自分と同じ道しか残されていない。

その【死】のチカラを使い魔血を葬る暗殺魔法士としてしか――

4 死の魔法陣

「おじいちゃん!!」

ザガロは息を切らしながら落ち葉の絨毯を駆け抜けていく

祖父ザックはその声を聞いてふっと振り向いた。いつもと同じ穏やかな表情で

「どうしたんだ？ ザガロ」

鬼気迫る表情で駆けつけたザガロを見てザックは不思議そうな声を出した

見下ろしたザガロの金色の瞳には涙のようなものがきらりと光っていた。

「どうした？ なにかあったのか——？」

「ごめんなさいっ！」

その瞬間ザガロは誰に言われることなくザックに向かって頭を下げた

瞳からは大粒の涙がポロリポロリと自然とこぼれた。

「僕……僕……人を殺しちゃったんだ……」

「ザガロ……」

「知らなかったんだ。僕の左手にこんな恐ろしいチカラが眠っていたなんて……僕、知らなかったんだ。ただ左手でその人に触れただけなのに——その人苦しんで死んで行っちゃったなんて……僕……僕……」

ザガロの告白にザックはただただ何も言わず泣きじゃくるザガロをギュッと抱きよせた。

ザガロは不思議だった。怒りも嘆きもしない祖父の姿を見て何とも言えない複雑な気分になった。

「ザガロ、安心せい……」

そう言うとザックは震えるザガロの肩を優しく叩いた。

「いつかは血に目覚める——それが魔血だ。お前はただ持っている血に目覚めただけのこと。それだけじゃ」

「でも——！ 僕の持っている血はみんなとは違うっ！」

「そうじゃ。わしらは【死】の魔血の生き残りじゃ……それはわかっておるじゃろう」

「そうだけど——っ！」

ザガロがそう言った瞬間、ザックはザガロの手をギュッと引っ張り自分の影に隠した

ザガロははっと祖父ザックを見上げた。彼はいつもより何倍も険しい表情で墓場の入り口を見つめていた。

「どうやらお客さんじゃ……」

「え……？」

そう言われザガロはハッとザックの見る先を見た。

ザッザッと落ち葉を踏みしめる複数の足音。それは段々数も音も勢いもどんどん増していった。

ついに、ザガロが恐れていた事態が訪れた。ベアール家の追っ手たちがこの墓地に現れてしまったのだ。

「ザガロ、逃げろ……」

「え？」

その言葉にザガロは仰天した

だが祖父ザックは左手の封印のバンテージをゆっくりとほどきながら前を見据えて言った。

「お前には与えられた使命がある。そのために——お前は生きろ」

ザガロは祖父の言っている意味がわからなかった。

与えられた使命？ そのために生きる？ どういう意味なの？ 教えておじいちゃん——!!

だが追っ手たちはもうすぐそこまで来ている

ザガロは鬼気迫る祖父の背中を見てそれ以上追求することを断念せざるをえなかった

「ごめん……おじいちゃんっ！」

ザガロはぎゅっと右手を握りしめるとそのまま森の奥の方へ逃げ出した

それと同時に「逃げたぞ！」「あっちだ！」という追っ手たちの野太い声が森中に響き渡った

やがて——

ザックの前に岩みたいに大きな魔血兵がぞろぞろと取り囲む

手には魔剣、身体には鎧、顔は醜悪に満ちあふれていた。

「貴様……ザガロ・ディアルグレイを何故逃がした！」

魔血兵の一人が魔剣から魔法の水の刃を出しながらザックを脅す。

だがザックはゆっくりと左手のバンテージをほどくだけだった

「アイツは我がベアール家の坊ちゃんを殺した下手人だ！ 今ならお前を許してやる。さあザガロ・ディアルグレイを我々に突き出せ!!」

「嫌だと言ったら？」

「何ッ!!」

ザックのその挑発的な言葉に魔血兵たちの怒気がさらに一段と上がった。

だがザックはあえて冷静であった。まるでこれが役目だと心で覚悟しているように——

「貴様っ！ そんなに死にたいのか！」

「その言葉——そっくりそのまま返してやるッ！」

その瞬間だった。

ザックの左手のバンテージがひらひらと宙に舞った。

ついに露わになった左腕はまるで呪いにかかったような濃いアザの ^{マジックスペル} 魔文字 で彩られ掌には真っ赤に光る死の魔方陣が浮かんでいた

「我が血に眠る【死】を司る蛇よ——汝に告ぐ。此の邪悪なる者どもの命を——奪え!!
サークル・オブ・デス
死の魔方陣 !!」

その呪文を唱えたと同時に地面に突き立てられたザックの左手。

次のその瞬間、魔血兵たちの足下にザックの掌と同じ逆三角形の魔方陣が赤く浮かび上がった。

その大きさは直径5メートルほど。魔血兵たちは驚きの表情を浮かべたがもうおそかった。

バースト
「発動ッ!!」

その瞬間、彼らの足下の魔方陣は妖しく赤く煌めいた

その光は一瞬にしてその上に立っていた魔血兵たちを包み込む

そして、彼らは声も出さずに膝からガクッと崩れ落ちた。そこ顔は青白く強い死相が浮かび上がっていた

死の魔方陣——それはその上に立つ者の死を意味していた。

やがて、ザックの周りには魔血兵の物言わぬ骸だけが転がっていた。

ザックが地面を突いた手をゆっくりと離れたその瞬間だった。

背後に強大な殺気がおぞましく生まれていく。

ザックはハッとして後ろを振り返ったが、もう遅かった。

「なっ……!!」

水の魔法の刃は冷たくザックの曲がった身体を貫いた。

目の前には魔血兵の醜悪な笑み。まるで勝ち誇ったかのようなその笑みを見てザックは口から血を流しながら無念の表情を浮かべた

——殺し……きれなかった……

これが自分の限界だとザックはそう悟るしかできなかった

やがて温度を感じない水の刃が身体から抜けザックの身体は落ち葉の敷き詰められた地面へ叩きつけられた。

「ちっ……手間かかせやがって……」

魔血兵はザックの身体を軽く蹴ると、生き残った仲間たちに命令した。

「いいか、ぼっちゃんの仇ザガロを追え。殺しても構わん」

すぐ側にいた魔血兵たちの足音はみるみるうちに小さくなって消えていく

ただ一人力なくその場に残されたザガロは最後の力を振り絞るように胸の奥を苦しそうにまさぐった

傷口から血がどくどくと流れ出しているのがわかる。

だが死してなおこれだけは彼に伝えたかった。

「ザ……ガロ……」

ザックの手に血で滲んだ手紙が握りしめられる。

ひゅうううっと秋の夕暮れの冷たい風が木の葉を舞わせる。

ザックはその中で静かに眠りについた。永遠に醒めない眠りへ——

「後は……頼んだ……ぞ……」

5 暗殺魔法士レヴィ

はあっ……はあっ……！

落ち葉の絨毯が延々と敷き詰められた森をザガロはただただ目的なく疾走していく

追っ手の怒号と足音はすぐに大きく近づいてくる。

祖父の言った意味は今もわからない。わからないけど生きることが自分の使命だと言われた気がしてザガロは必死で追っ手たちからにげようとした

だけど——それにも限界があった。

「あっ！」

次の瞬間、ザガロの背後から魔法の気配が増幅した

ザガロは シールドスペル 魔障壁 を発動させようとしたが、どうやら相手側の魔法の方が早く完成を見た

間に合わない——そう思ったザガロはすっと前のめりにかがみ込むと受け身の体勢を整えた

次の瞬間、槍のような幾数の氷柱がザガロめがけて襲いかかった

受け身のお陰で直撃は免れた。だけどそれはザガロの腕や頬を掠めて傷つけ、そして——

「痛っ……!!」

ザガロは右足に激痛を覚えた。

氷柱が一発だけ右足に被弾していた。その貫かれた冷たい傷口を庇うようにザガロは片膝を付く。

そして、じりじりと近づいてくる魔血兵を睨み付けた

彼らは邪悪な笑みを浮かべゆっくりとザガロとの距離を詰めていく

まるで、ゆっくり料理してやる——と言わんばかりに。

「ごめん……おじいちゃん……っ」

ザガロは無念の表情を浮かべ顔をうつむけた

もはやこれまで——そう心の中で思った瞬間だった。

ひゅんっと何かが秋の夕暮れの空気を切り裂いていった。

ザガロははっと前を見た。次の瞬間、あれほど余裕の表情を浮かべていた魔血兵たちの表情が凍り付いた。

風を切る ^{ブラックホーク} 黒い鷹 は今にもザガロに襲いかからんとした魔血兵の首をごっそり持って行く

血飛沫を上げ倒れる骸。その様子を見て魔血兵たちは更に殺気立ち周りを警戒した。

黒い鷹のような刃は一人の少年の手に着地する。

木の葉の絨毯の上に着地した彼、それはまるで闇に解けるような黒ずくめの服に身を纏っていた。

「非魔血……？」

ザガロは彼の顔を見てふとその言葉をつぶやいた。

彼の肌は褐色だった。魔法の使えない黒き民と言われる魔法帝国を形成するもう一つの民族『非魔血』の特徴だった。

それに気づいたのはザガロだけではなく魔血兵たちも同じだった。

先ほどの殺気だった表情はまた余裕の笑みの変わる——非魔血など相手じゃないと言わんばかりに

だけど彼はそんなことも気にしない様子でゆっくりと落ち葉の絨毯を踏みしめ魔血兵たちへと近づいていく

その真紅の瞳はどこか機械的でただただ虚ろに彼らを睨み付けている

血の滴ったブーメラン状だった刃を一気に分解し、一対の黒い短剣に変化させた次の瞬間彼は

地面を軽く蹴った

次の瞬間彼は瞬くスピードで魔血兵の真ん中へつっこんでいった

彼らはハッと武器を構えたが彼のスピードに対してその反応は若干劣っていた。

瞬間的、彼は一人の魔血兵に斬りかかった。

落とされた刃の激しい断絶音。黒い太刀筋は魔血兵の右手を血飛沫と共に斬り飛ばした。

魔血兵の断末魔が続く中、彼はさらにスピードに乗り魔血兵たちを蹴散らし始めた

ある者は彼の黒い刃に腹を刺され、ある者は彼のブーツに頭を蹴り飛ばされ——その戦い方は非魔血と言えど見事としか言えなかった。

だが——修羅の如く魔血たちを蹴散らす彼にもやがてピンチが訪れた

ザガロははっと奥で強い魔法の気配を感じそちらを見た。

そこには一人の魔血兵が手を前にかざし呪文を詠唱していたのだ。

「我が血に眠る【水】の蛇よ——汝に継ぐ。此の邪悪なる者どもに永遠の氷の牢へ——閉ざせ！
アイスウォール
氷柱壁 !!」

その瞬間、彼の目の前にそれは高い氷の壁がそびえ立った。

それはみるみる大地に根を張り彼の足下を一瞬にして凍り付かしてしまう——

ああ、もうダメだ——ザガロは絶望した表情で顔をうつむけた

彼は魔法が使えない非魔血。ちろん魔法に対する防御法など知るはずもなく——

——だけど、ザガロのその予想は思わぬ方向へ崩された。

その瞬間、ザガロは別の魔法の気配を感じ取った。

それは魔血兵の使う【水】の魔法とは質の違う——強い熱を帯びた別の属性の魔法だった。

びしっ——

魔血兵が彼を閉じ込めた ^{アイスウォール} 氷柱壁 がその瞬間大きなひびが入った

その亀裂はみるみるうちに大きくなり、そしてそれはやがて粉々に碎け散った

「なんだとっ！」

魔血兵は驚愕の表情を浮かべ氷を破った彼を見た

その足下からは地獄の底から上がってきた様な真っ黒な炎が纏わり付く

「こんな子供だまし俺に効くと思った？」

彼はその黒い口元にニヤッと笑みを浮かべる

そして両手を横にかざしたその瞬間、彼の足下に纏わり付いていた黒い炎が勢いを増した

「我が血に眠る【火】の蛇よ——汝に告ぐ。汝の灼熱の力で此の者どもを業火の塵へと——燃
やせ！ ^{フレイムロンド} 焰舞 !!」

「くそっ！」

魔血兵たちはその瞬間、急いで彼の魔法を止めようと新たな呪文を唱えだした

だけどそれはすべてが遅かった。

彼は手を宙で泳がせた次の瞬間、黒い炎は彼の手に纏わり付き ^{ターゲット} 標的 を狙いを定めた。

^{バースト}
「発動!!!」

彼は黒い炎が纏わり付いた両手をクロスさせるように振り下ろした

その瞬間、黒い炎は二撃の灼熱の衝撃波へと変わった。

それは何もかもを飲み込む渦だった。

魔法への対処が遅れたとは言えもしかしたら対処が間に合っても結果は同じだったかも知れない——そう思わせるほどの強い魔法力を持った炎だった。

やがて——気配がなくなった。黒い炎に包まれた魔血兵たちの生の気配がぱたっとなくなった。

彼は前にかざした手をギュッと握った。

その命令に従順になるように黒い炎は勢いを急激に弱める。

辺りには木の葉と肉と骨がやけたような何とも言えない焦げ臭いにおいが漂う

そして黒い炎が無くなったときにザガロを襲っていた魔血兵はもうこの世には存在するものではなくなっていた。

「あ……」

ザガロは余りの惨劇に思わずその場にへたり込んだ。

ただただ信じられない気分で一杯だった。

訓練を積んだ魔血兵をやっつけたのが自分と歳がそう離れてない少年であることもそうであるが、何より信じられないのは彼が褐色の肌で魔法を使ったという魔法帝国の常識さえも逸した事実だった。

「だれ……？」

ザガロは震える唇でかすれた一言を言った。

その問いに彼はくるっとこちらを向く。

やはりその瞳はどこか機械的な赤い光を湛えているが、ザガロにはその瞳がどこか悲しげに映った。

「怯えるな」

彼は一言そう言うとゆっくりとザガロの方へと近づいた

「俺はある人に頼まれてあんたを助けに来た。ただそれだけだ」

「ある人——？」

その問いに彼はそれ以上深くは答えなかった。

否、答えられないのかも知れない。彼も相当な裏のありそうな人物だ。詮索しない方が自分のためかも知れない

「ありがと——ッ!!」

ザガロは彼に礼を言おうとし立ち上がろうとした次の瞬間、ザガロはガクッと膝から崩れ落ちた

——そうだった。

先ほどの魔血兵の一撃を脚に食らってしまったんだった。

「ち……手負いかよ」

彼はそんなザガロを見て舌打ちした。そしてザガロの側まで近づくとしゃがみ込み傷口に食い込んだ氷柱つららに手を触れた。

「ちょっと痛いけど我慢しろよ……」

そう言ったその瞬間彼はギュッと氷柱を握りしめると、そこからまた禍々しい熱を帯びた小さな黒い炎が上がった

「——ッ!!」

それは熱いのか冷たいのか、それとも痛いのか辛いのかわからない不思議な激痛だった。

だが彼が握った氷柱は彼の熱でみるみるうちに溶けて水に変わっていった。

「痛いッ!! やめろよッ!!」

ついにはその熱に耐えられなくなったザガロは大きな声を上げて叫んだ。

それを聞いて彼はその手の炎を治めた。

「我慢しろって言っただろ」

「こんな治療の仕方聞いたことないっ！ 傷が悪化するじゃないかっ！」

「……手加減したんだけどなあ」

そう言うと彼は呆れた表情を浮かべ立ち上がった

「じゃ、行こうか」

「へ？」

その一言にザガロは呆然として彼を見上げた

彼は冷たい表情でずっとザガロを見下ろしていた。

「あんたを助けたって言った人のところ。そろそろ本気で急がないと日が暮れる」

そう言うと彼はゆっくりと落ち葉の絨毯を踏みしめ森の奥へと歩いていった

「ちょっと待ってッ!!」

「あ、俺回復魔法覚えてないから、後の傷はあんたで何とかしろよ」

「そうじゃなくてさ……ッ！」

そう言うとザガロは傷ついた脚を庇いながら立ち上がり彼の後ろ姿をキッと睨み付けた

「君は一体何者なの？ 名前くらい——教えてよ！」

その一言に彼はぴたっと足を止める。そしてもう一度ザガロを振り返って見た

寂しげで虚ろな赤い瞳で——

「暗殺魔法士」

「え？」

「俺の名前はレヴィ。暗殺魔法士だ……」

暗殺魔法士レヴィ。それがザガロにとって彼との初めての出会い。

そして、それは後々まで因縁を残す運命の出会いだった——

6 濁血（にごりち）

暗殺魔法士レヴィにとってこれはただの任務の一つでしかなかった

——ベアール家の追っ手の者どもから墓守の少年ザガロを守って連れてこい。

クライアント

依頼者 からはそう伝えられただけ。それ以下もそれ以上の意味もなかった

でも……どうしても腑に落ちない部分がいくらもある

レヴィの後ろで足を引きずりながら必死にレヴィに追いつこうとしている赤髪の少年ザガロをちらっと振り返りレヴィはため息をついた

「俺は魔血を殺すために生まれた来た暗殺魔法士だぞ……何で魔血を助けてるんだ……」

レヴィはぶつぶつとそう文句を言いながら足を速め先を急ぐ。

もうそろそろ日が暮れる。クライアント 依頼者 との待ち合わせ時間も近づいている

「ねえ……待ってよッ！」

ザガロは足を引きずりながら先を急ぐレヴィに言い放った。

だけどレヴィの急ぐ足は止まることはなかった

「僕、怪我してるんだよ。もうちょっとゆっくり……」

「関係ないね。俺は急いでるんだ」

「そうだけど……」

そう言いつつザガロはムツとした様子で俯いた。

だがそれはレヴィの方も同じように苛ついていたのだ。

「まったく……何で魔血なのに自分で回復魔法使えないんだよ……これじゃあただの足手まといじゃねえか……」

「ねえッ！」

そんなぶつぶつ文句を言うレヴィに対しザガロはさらに声を荒げた。

「……なんだよッ！」

「一体、君は何者なの？ 僕をどこに連れて行こうとしてるの？」

それに対しレヴィはチッと舌打ちして後ろを付いてくるザガロをにらみつけ、言い放った

「んなこと、そのうち分かる！」

レヴィはいらつきを吐き出すようにそう言い放つとまた前を向きまたぶつぶつと文句を言いだした。

「本当に信じられない。なんでイスラークはこんな役立たずの墓守に執着するのか俺には理解できない……それに大体何でこの俺がこいつのお守りをしなきゃ……」

「ねえねえッ！」

更にイライラを募らせるレヴィの心をかき乱すかのようにザガロは更に質問をつっこんだ。

さすがに堪忍袋の緒がキレたのかレヴィはくるっと踵を返しザガロをまっすぐ睨み付けた

「だからッ！ 何なんだよ、一体！」

「レヴィって……魔血なの？非魔血なの？」

「……え？」

その一言にレヴィは訝しげにザガロの顔を見た。

ザガロはそんなレヴィを見て聞いてはいけないことだったのかと言わんばかりの顔をしている

「いや、レヴィの肌は黒いけど……さっき魔法使ったじゃん。あれって……」

「混ざってんだよ」

「……え？」

その一言にザガロは首をかしげた。

だがそんな彼を置いていくかのようにレヴィはまた脚を進めだした

「俺は魔血と非魔血の間に生まれた——^{にごりち}濁血^ちってヤツだよ。だからこんな肌してても魔法の血があるから魔法が使える……」

あんなに嫌ってる親父のチカラなんだけどな——

レヴィは苦笑しながらその言葉を噛みしめるように心の中で言葉の続きを呟いた。

「……ごめん。僕悪いこと言ったかな？」

ザガロはちょっと反省したのかしゅんと落ち込んだ声でレヴィに話しかける

それに対しレヴィはニヤツと笑った。

「バーカ。もう差別には慣れてんだよ」

「でも……」

「もういいよ。意識される方が気が悪い」

レヴィはそう言うと深いため息をついてまた大股で歩き出す。

自分は魔血でも非魔血でもない——この^{くに}帝国で最も忌み嫌われている^{ハーフ}混血^ち魔血『濁血』であることは悲しいかなもう18年間痛いほど慣れてしまったこと。

もう奇異の目で見られようが、言われ無き差別を受けようがどうでもいい話。

俺はもう——魔血を殺すしか自分の存在意義を見いだせないのだから。

「ねえ……レヴィ」

後ろを着いてくるザガロはまだ何か言い足りなさそうにレヴィに話しかける

レヴィは半分無視しようかと思ったが、そうされ騒がれ追っ手に見つかるのもめんどくさかったから嫌々ながら彼の方を振り返った。

「なんだよ……」

本当にこいつは俺と同じ年なんだろうか——レヴィはそう呆れながらザガロを見た。

ザガロは不思議そうな顔でレヴィを見つめ言った。

「暗殺魔法士って——何？」

「はあ？」

「意味はわかるんだよ。魔法が使える暗殺者——ってことでしょ。だけどそれって魔血が魔血を殺す暗殺者ってことだよ。でもレヴィはハーフ魔血で、どっちでもなくて——あー！意味がわからないよッ！」

こいつは何を難しく考えてるんだ——？

レヴィは悩みまくるザガロの様子を見て呆れたようにもう一度深いため息をついた。

ともかく今まで墓守としてのほほんとして暮らしてきた下級魔血のザガロと差別の中を生きてきた暗殺魔法士のハーフ魔血の自分とでは大分思考回路が違うように出来上がっているようだ。

説明するのもめんどくさい——そう思ったレヴィは冷淡にザガロに背を向けるとまた歩き出した

「それは、この後会う クライアント 依頼者 に聞いてくれ」

「クライアント——？」

ザガロはその一言に目をぱちくりと瞬いた。

「そう、あんたを助けろって俺に命令した張本人。そいつに聞けよ！」

レヴィは半ば投げやりにそう言い放つと、歩く速度を速めるように大股で歩いた。

やがて——日は暮れて辺りに夕闇が支配しだした

ザガロはもう何も者を言わなくなり、黙ってレヴィに着いてくるようになった。

彼の中にはたくさんの疑問が渦巻いているだろう。そう、昔の自分がそうだった。

だけどその疑問ももうすぐ晴れることだろう。『絶望』という闇が切り裂いて——

夕闇の中レヴィの脚がピタリと止まった。

いつの間にか闇に支配されたノーフォークの森は抜け、貴族屋敷の街明かりが光る場所に出ている。

「——どうしたの？」

後を着いてきたザガロはレヴィの歩みが止まったことを不審がって彼の顔をのぞき込んだ。

レヴィの赤い瞳はただまっすぐにある人物を見つめていた。

空色のマントコートを羽織った軍服姿の青年将校を——

「——軍人!!」

ザガロは彼を見て明らかに警戒の色を見せた。

無理はない——軍人など罪を犯した自らを逮捕しに来たと考えるのが普通の思考だ。

だけど目の前の銀髪の青年将校は殺気を見せることなく冷淡な表情を浮かべたまま二人に近づいてきた。

そしてレヴィにむかってすつとその長い手を差しだした。

「ご苦労。レヴィ」

「——え!!」

その様子を見てザガロは少なからず衝撃を覚えた。

無理もない。「彼を助ける」と言った暗殺魔法士と「彼を捕まえる」はずの青年将校が裏で手を結んでいた事実が発覚したのだから。

「レヴィ……騙したな！」

それを見てザガロは怒りの表情を浮かべレヴィに詰め寄った。

「助けるとか言いながら、結局僕を軍に売るのはかよ!! ホント……見損なったよ！」

「うるさいな……黙ってろよ」

「僕は許さない！ 一度は君を信じたのが恥ずかしい——!!」

その瞬間、レヴィは表情を変えずにザガロのみぞおちねらって拳を振るっていた。

「かは——ッ!!」

ザガロは苦しそうな呻き声を上げレヴィを迫力無い瞳で睨み付けた。

レヴィはやっぱり表情を変えず飄々と青年将校を見つめるだけだった

やがて、気を失ったザガロの細い身体は石畳の上に倒れ込んだ。

「——乱暴なことするね」

銀髪の青年将校は気を失ったザガロの身体を心配するようにしゃがみ込んだ。

「ギャーギャー言われて追っ手が来たらあんたも厄介だろ。ジェラル大佐」

その一言を聞いてイスラッグ・ジェラルはニヤッと笑みを浮かべレヴィを緑と青の瞳で見た。

「ベアール家の皆さんにはもう手は打った。もう彼は奴らに追いかけれられないと思うよ」

「ホントに？ あんなに血相変えて襲ってきてたのに？」

「魔血の世界は権力がある者がどうにでも出来るんだよ」

それを聞いてレヴィは顔色に小さな緊張感を浮かべた。

イスラーグの緑と青のオッドアイは昔からどうしても苦手だった。あの瞳で見つめられるとなんか生きた心地のしない冷たさを感じるのだ。

「ともかく、ご苦労だったね。レヴィ」

イスラーグは立ち上がるとレヴィの労をねぎらうようにもう一度手を差し出した

だがレヴィはそれを嫌うかのように振り払うとイスラーグに背を向けた

「こんなガキのお守り、もうゴメンだね」

「ガキって……」

一応君と同じ年なのに——イスラーグはそう言いたげに笑った

「——ともかく、君にはもう少し付き合っ貰うよ」

「やれやれ、まだあるのかよ」

「もちろん……」

そういうとイスラーグはマントコートを翻すとニヤツと残酷に笑った。

「君には新しい暗殺魔法士誕生の場に付き合っ貰わないと困るからね」

7 帝国魔法騎士団

魔法帝国『帝都』のニューヒース河西の対岸。そこは昔から魔血たちの^{テリトリー}領域だった。

綺麗に整備された町並みは、貴族屋敷から官公庁、そして宮殿まで延々と続いている。

そして――

帝都のほぼ真ん中、赤煉瓦と白大理石で彩られた重厚な洋館。

その入り口の真ん中には、魔法帝国の旗印となっている皇帝一族フレディメルゲン家紋章、有翼の雷獣の彫刻――

ここは西ニルッケン大陸最強と謡われ恐れられた魔法帝国軍魔法騎士団本部だった。

「良い加減にしてくださいよッ!!」

そんな重厚な入り口を開けた騎士団本部で一悶着起こさんばかりにある男の怒号が響き渡る

その卵形の男はたくさんの手持ちの魔血兵を連れ恐れ多くも最強の騎士団に乗り込んできたのだ

「私の手下が見たのですよ！ ジェラルール大佐がああ赤髪の墓守をこの騎士団本部に連れ込んだのを――」

その男――オーギュスト・ベアールはたくさんの士官候補生たちに押さえ込まれながらも怒りにかまかせて激しく詰め寄った

「あの少年は話が息子を殺した犯人だッ！ そんな男を匿うなんてジェラルール大佐は何を考えておられるのです！ ねえ！ 聞いてるんですか。ティリスリー少佐!!」

そう言うとオーギュストはキッと目の前の士官を睨み付けた。

それは柔らかいピンク色のウェーブヘアーにばっちりアイメイクを施した――男の魔血少佐だった。

「あーもう。うっさいわね。マニキュア塗るのミスっちゃうじゃない」

そう野太い声で一言そう言うと彼——否、彼女は指に塗った真っ赤なマニキュアを自らの息を吹きかけ乾かしていた

こんなふざけた格好をしているオカマ将校が「紅薔薇のアキラ」と恐れられている拳闘魔法士アキラ・ブリトニー・ティリスリーとは思いもしなかった。

「と、ともかく、私はジェラルド大佐との面会を申し入れたいのですッ！」

「なあに？ イスラッグに会ってどーするつもりよ」

「どうするって……」

アキラのその一言にオーギュストはうっと言葉を詰まらせた

それを見て、アキラは席から立ち上がる。とんでもない大きさの偉丈夫だった。

「あんたねえ、自分の立場弁えなさいよ。イスラッグはあんたとは比べものにならないくらいの権力持ってるんだからねッ！」

「そうはいいますが……我が家は代々ジェラルド大佐が所属する【水】の筆頭を務める名家なのですよ。偉いと言えば負ける気はしませんなあ」

そう言うとオーギュストはニヤッと勝利の笑顔を浮かべた。

たかがぱっと出の若輩大佐だ。魔法力はダブルスコアで負けているかも知れないが歴史と家柄ではこちらが勝っているはず——だ。

「ホント、分からず屋ってやーね」

アキラはため息混じりにそう言うと近くにいた部下に指である合図をする。

彼の側に士官候補生が歩み寄るとある書類を広げ、オーギュストに突きつけて見せた。

「これは……」

オーギュストは書類に顔を近づけその書面をゆっくりと読み始めた。

すると、みるみるうちに彼の顔は青ざめていき口を振るわせた。

「オアネス・サドウ公爵——あんたたちのボスである【水】の宗主がザガロ・ディアルグレイの恩赦を命じているのよ。この意味ちゃんとわかるわよね。ベアール卿」

そう言うとアキラは憎たらしく得意げに笑って見せた。

それに対しオーギュストは悔しさで顔を俯け膝に置いた拳を握りしめた。

「何故です……」

「ん？」

「なぜサドウ卿は我々の意に反する命令を下したのですか！ ヤツは【水】の敵ですよッ！」

その一言にアキラは深いため息をついてオーギュストの顔を覗き込んだ。

「さあねえ……うちにもそれはようわからんわ」

「じゃあッ！」

「でも少なくともこれだけは言えるんじゃない？ サドウ卿やイスラークは彼のこと——【水】の敵だとは思ってないってこと」

「な——ッ！」

その一言にオーギュストは絶句した。

だがアキラのその一言に何も言い返す言葉が見あたらなかったのだ。

「……まあ、うちは【土】だから関係ない話だけどね～」

そう言うとアキラはもう一度真っ赤な口紅がついた口で爪に息を吹きかけ踵を返した。

直後、床に崩れ落ちるオーギュストの嗚咽が聞こえたが、アキラは何も見なかったかのように応接室の出口扉へ歩いて行った

そして、部下の士官候補生たちに「あとは頼んだわよ」と言い残しその部屋を出た。
「イスラークのヤツ……」

応接室から漆黒の支配する廊下に出てきたアキラは低い男の声で一言ぼそっと呟いた。

アキラは事情をすべて知っていた。

イスラークが帝国軍大佐でありながら暗殺者を飼っているということも、レヴィの他にザガロも暗殺魔法士に仕立てようとしていることも――

軍規のことを考えればそれを咎めるべきかもしれない。だが、アキラにそんな気などさらさらなかった。

「さあて……うるさい雑魚追い払ってやったんだから、イスラークに褒めて貰わなくっちゃ」

その瞬間アキラは乙女見たく目を輝かせにこにこ笑った。

身体は男、心はオトメ。アキラは機嫌良く凶体に似合わず小刻みにステップを踏みながら、真っ暗な廊下の奥へと消えていく

敬愛し服従すべき上司のため――そして一方的に愛してしまった初恋の人のためアキラ・ブリトニー・ティリスリー少佐は今日も甲斐甲斐しく働くのだった。

8 取引

頬を伝うひんやりとした感触。

ただただ不安だった。自分がどこへ向かうのか。どこへ行き着くのか——

だけど——その不安を押しつけてでも目覚めなければいけないときがある。

ザガロはゆっくりと瞼を開く。

なんて冷たい部屋なんだろう——そこは、夜の闇だけで彩られたある執務室。調度品の鎧兜は差し込む月光で鈍く光り、重厚な椅子や机は息を潜めるように存在している。

一体ここはどこ？

ザガロは起き上がろうとしたが、またしても右足の激痛がそれを阻んだ

「痛……ッ!!」

しんと静まった部屋にザガロの挙げた小さな声が思いの外大きく響き渡る

その時だろうか部屋の奥に一人の人影が居るのに気づいたのは——

「——起きたかい？」

その人物の瞳が緑と青、あり得ない二つの光を出す。

ザガロはその冷たい視線に思わず息を呑み、半歩身を退いた

「恐れることはないよ」

彼はブーツを鳴らしてゆっくりとこちらへ近づいてくる。

目に見えての禍々しい殺気はない。だけど何だろう。この全身を包み込む恐ろしさは——

「だれ……？」

ザガロは恐れを悟られないように彼をキッと睨み付けた。

だが彼はその視線も諸戸もせず、ザガロの側に来るとすっとしゃがみ込んだ

「君の味方」

そのオッドアイの魔血の青年将校はザガロに向かいニッコリ笑った。

そしてザガロの傷ついた右足に手をかざすと小さく呪文を唱えた。

キュア
「治癒——」

回復魔法——ザガロはそれを見て驚きを隠せなかった。

何故だろう——脚の傷が回復すれば自分はここから逃げ出すかも知れないのに……

だがそう思っている間にも脚の傷はみるみるうちに回復していく。

使ったのは下級回復魔法のはずなのにこれほどの回復力を持つと言うことはこの青年将校の持つ魔法が上質である証拠であった。

「ほら、これで治ったよ」

彼はそう言うと傷が無くなったザガロの脚をぽんと叩いた。

もう、痛みも何も感じない。立ち上がっても平気のようだ。

「あ……ありがとう……」

ザガロは戸惑った様子で感謝の言葉を言った。

彼は涼しげな笑みを浮かべ彼を緑と青の瞳で窓の向こうを見た

「しかし、君も無茶するね。また氷を炎で溶かす荒療治したんでしょ？」

それはザガロに向けて言った言葉ではなかった

彼の緑と青の視線のその先、窓の向こうのバルコニー。

夜の闇の中、バルコニーの柵に器用に座った黒ずくめの暗殺魔法士はひっそりと息を潜めていた

「俺に回復魔法教えなかったのはあんただろ。イスラーク」

暗殺魔法士レヴィはその言葉を言うと呆れた自然で彼を見た

「元々【火】の血は回復魔法を使う素質がない魔血だ。そんなのを君に教えたって無駄でしょ」

イスラークと呼ばれたその青年将校は銀色の髪を掻き分けると蔑んだように笑った。

それに対しレヴィは少し不満げな表情を浮かべ腕組みした

「ち……また【火】の悪口か」

「ともかく、君みたいな訓練を積んだ暗殺魔法士ならこんな荒療治で乗り切れるかも知れないけど、ザガロはまだ素人なんだよ……」

「そいつが回復魔法使えれば問題ないのにな」

そう言うとレヴィは赤い瞳を光らせザガロを睨み付けた。

それにザガロはどう答えたらいいのかわからず俯くしかできなかった。

「ザガロ・ディアルグレイ……」

名を呼んだのは目の前のイスラークと呼ばれた青年将校だった。

「ようこそ僕の執務室へ。僕の名はイスラーク・ジェラル。帝国軍大佐だ」

「イスラーク・ジェラル……帝国軍……大佐？」

その言葉を反芻しながらザガロは金色の瞳を大きく開く。

その名は聞かないわけじゃなかった。史上最年少で魔法騎士団の団長を務め、その氷の魔剣で敵一個師団を氷漬けにってしまったという伝説の持ち主『絶対零度のイスラーク』――

でも——何でそんな軍の幹部中の幹部の男が一人の魔血貴族を殺してしまった自分に会うのだろう。

そして、そんな自分になぜ味方だと囁くのだろう

「何か言いたそうな顔だね」

そんなザガロを見透かしたかのようにイスラークはクスクスと笑った

「いいよ。何でも質問してごらん。答えられる限り答えてあげるよ」

「質問——」

そう言うとザガロはハッとイスラークの顔を見上げる。

「じゃあ、ジェラル大佐……」

「イスラークでいいよ」

そう言うとイスラークは優しく微笑んでみせる。まるで年の離れた弟を見るような目で

ザガロは若干の安心を覚えたのか息を整え疑問を整理するかのようによく口調で聞いた

「じゃあ、イスラーク……あなたはどのようにして僕を助けるの？ 僕は罪を負ってそれ相応の罰を受けなきゃならない人間なのに。あなたみたいな身分の高い魔血が——」

「どうしてそう思うの？」

「え……」

イスラークのその切り返しにザガロは思わず言葉を濁す

だが次に突いてでた言葉は強い言葉だった

「僕は人を殺したんですよ！ それなのに彼と同じ属性のあなたが僕を庇うのはおかしいよ！」

それに対しイスラークは怒るでもなく悲しむでもなく平然とした表情でザガロを見つめ続けた

「言いたいのはそれだけ？」

「——え？」

「君はそんなつまらないことを気にしてるの？」

そう言うとイスラークは口元に冷たい笑みを浮かべザガロの肩をぽんと叩いた

「そう言えば君に報告してなかったね……レオハルト・ベアール殺害事件はもう済んだことになっているんだ」

「済んだこと？」

「我が【水】の血の宗主オアネス・サドウ公爵様がザガロ・ディアルグレイ——君に対し恩赦を与えてくれた。これで君は晴れて誰に追いかけられることもない自由の身だ」

ザガロは一瞬イスラークの言っている意味がわからなかった。

【水】の宗主？ 恩赦？ どうしてそんな単語が出てくるの——？

そう言いたげな顔でザガロはまっすぐとした視線でイスラークを見つめた

「腑に落ちない？」

「え？」

「なんか納得いってないような顔してるなど思っただけ。まあ気持ちはわかるけどね」

そう言うとイスラークはザガロを緑と青の冷たい瞳で見た。

「つまり君は一介の墓守に過ぎない自分にどうして【水】の宗主が恩赦を与えるのか疑問でならないんだろう」

イスラークの言葉はザガロの渦巻く疑問を見事に代弁していた。

だけど、それだけ自分の気持ちが見透かされていると思って今更ながらザガロはイスラークが怖くなった。

「一から説明してあげようか？」

イスラークはその言葉に何も言えなくなったザガロを見てゆっくりとした口調で話し出した。

「確かに君みたいななんの家柄もなく権力もない下級魔血の墓守だけだったら恩赦どころか今頃死刑台送りだったかもね。でもね、ザガロ——君は僕たち上流魔血が喜ぶような特別なものを持ってんだよ」

「特別な——もの」

そう言われザガロは混乱したように目を泳がしバンテージをした両手を隠した。

思いつくものは一つ——それは……

「隠すこと無いだろう」

「——!!」

その瞬間イスラークはザガロの左手を乱暴に掴んだ

そして、彼の手に巻かれたバンテージを無理矢理引っ張った

くるくると宙を舞う包帯。それはみるみるうちにほどけていく。

白日の下に晒されたザガロの左腕。それは禍々しい紫色の マジックスペル 魔文字 で彩られその掌には逆三角形の魔方陣がくっきりと焼き付いていた。

「そうだ……これだ……」

イスラークはザガロの手を強く掴むと自らの緑と青の瞳にその魔方陣を焼き付かせるかのようにじっと見つめた

「これが、レオハルト・ベアールの命を一瞬で吸い取った【死】の魔方陣——」

ザガロは左手を捕縛するイスラークの緑と青の瞳を見て激しい恐怖に陥れられた

それは命の危険の恐怖とはまた質の違う、得体の知れない不気味な恐怖感だった。

「やめてッ——！」

ザガロはイスラークに捕まれた左手を激しく嫌い揺さぶった。

それに対しイスラークは意外にもあっさりとその手を離してくれた。

ザガロはキッと金色の瞳でイスラークを睨み付ける。だが、彼はそれさえも諸戸もせずにこにこと笑うのみだった。

「ザガロ・ディアルグレイ……君は【死】の魔血の生き残りだね」

「——」

その問いに対しザガロは何も言わずほどかれたバンテージを拾った。

イスラークはザガロに背を向けると窓の方へと歩いていった

「かつて我々魔血は【火】【水】【風】【土】【雷】【光】【時】【死】——8種類の属性がありそれぞれ独立した王国を持っていた——だけどその王国たちはお互い覇権を握ろうと魔血同士殺し合うという愚かな戦争を起こしてしまった。中にはその戦争で完璧に絶えた魔血属性もある。【時】や【光】——そして君の先祖である【死】」

そう言うとイスラークは深いため息をついて窓の向こうの闇を見た。

「【死】の血は真っ先にやり玉に挙げられたんだってね……手を触れず命を奪うという恐ろしい魔法を使う悪魔と言われ迫害の上の迫害を受け血が絶えたと文献では書かれてる。だけど——」

イスラークはそう言うともう一度緑と青の瞳で困惑するザガロを見た

「【死】の血は細々ながら絶えてなかったんだね。墓守の家系ディアルグレイ家の中に脈々と受け継がれてきたんだ」

その言葉にザガロは何も言えなかった。

否、あのチカラを使って人を殺してしまった時点でこうなるシナリオになっていたのかも知れない。

そう思うとザガロは悔しくてならなかった。

「僕を——どうしようとするのですか？」

ザガロはかすれそうな声で一言イスラークに聞いた。

それに対しイスラークは声を上げ笑った。

「何度も言うけど君は無罪放免を勝ち取ったんだよ」

「だけどそれには裏があるんでしょう」

ザガロの核心を突いたその言葉にイスラークは蔑んだ笑みを口元に浮かべた

「じゃあ、結論から言おうか」

イスラークはそう言うため息をつきザガロを見た。

「君、僕の下で働いてくれないかな。暗殺魔法士として」

「え——ッ！」

イスラークのその一言にザガロは絶句するしか出来なかった。

だがイスラークはまるで悦に入ったかのように饒舌に語り出した。まるで新たなる^{おもちゃ}武器を手にした子供のように

「すべては君の【死】のチカラを手に入れるため……僕はそのためにサドウ卿に何度も掛け合ったよ。これがかなり骨が折れてね……でもあのお方も納得してくれたんだよ。新たなる武器の追加にね——」

「武器——」

ザガロは讒言のようにその言葉をつぶやく

何かの間違いだろう。自分にはレヴィみたいな活躍を求めるなど——夢物語だ

今まで墓守としてひっそりと血を絶やさず生きてきた自分に——暗殺魔法士に成れなど。

「断れないよ」

ザガロのその迷いを察してかイスラーグは中央で手を組みじっと彼を緑と青の瞳で見た。

「何度も言うけど僕とサドゥ卿は君の恩赦を勝ち取った恩人だよ。そんな僕たちの要望を断れば——どうなるかわかるよね」

「断れば、ベアール家の人たちに引き渡す——そう脅すんだね」

「まあ、早く言えばそう言うことになるね」

イスラーグはその言葉に対しふっと頬を緩ませた。

それに対しザガロの心は次第に怒りに満ちあふれていく。

どうしてこうなったんだ。どうしてこんな非道な仕打ちを受けなきゃならないんだ——

それは誰に向けることのできない理不尽な怒り。そして次第にその怒りはザガロの瞳に涙を溜め始めた。

「僕が憎いかい？」

そんなザガロを見てイスラーグは冷淡に一言聞いた

ザガロは素直に言った。

「憎いよ……」

「そう……それでいいんだよ。ザガロ」

そう言うとイスラーグは納得したように目を閉じた

「憎しみこそ暗殺魔法士の^{パワー}の活力。それが強ければ強いほど上質な暗殺魔法士ってことになる。そう
だろ、レヴィ」

イスラーグはそう言うと窓の向こうで息を潜めるレヴィをちらっと見た

レヴィはバルコニーの柵にじっと座ったまま静かな声で返した

「何故俺に振る？」

「君だって同じだ。今まで憎しみがあってこそここまで来れたんでしょ」

その問いにレヴィは沈黙で返した。

だけど闇の中に光るその赤い瞳はどこか怒りに満ちているようにも見えた

「——つまり、それだけの憎しみがあれば君もいい暗殺魔法士になれるよ。ザガロ」

「……」

その言葉にザガロも沈黙で返すしか出来なかった

ザガロは溢れた涙を腕でぐっと拭うとイスラーグをじっと見据えた。

イスラーグはまるで大きな巨壁のようにザガロの前に立ちはだかっているように見えた。

「さて……と。そうは言っても君は『暗殺』に関してはまるで素人だよねえ」

そう言うとイスラーグは椅子から立ち上がると苦笑がちにザガロを見た。

——そんなの当たり前だ。ザガロはその言葉にぶすっと頬を膨らませる

この前の事件が人を殺した初めての出来事だったのはもうイスラーグだって知っているはず。そんな僕に暗殺魔法士なんて——

「君は素質は百点満点なんだけどね。あとは実技と経験のみってところかな……」

そう言うとイスラーグは窓の向こうのレヴィをちらっと見た

「と言うわけでレヴィ。仕事だよ」

「はあ？」

その言葉にレヴィは身体を起こしイスラークを窓越しに睨んだ。

だがその迫力のある視線をイスラークはにこにここと笑って逸らし、彼にとんでもない頼みを突き付けたのだ

「レヴィ、次の任務にザガロを相棒として連れて行ってくれない？」

「は——？ 相棒？」

イスラークのその一言にレヴィは一瞬何を言っているのかわからないような混乱の面持ちを見せた

だが、すぐにその意味を知ると彼の顔はみるみるうちに怒りに染まる。

「ふざけるなっ！」

レヴィはバルコニーに降り立つと窓越しのイスラークに襲いかからんかの如く激しくまくし立てた

「何度も言うけど、何でこの俺がこんなガキのお守りをしなきゃならねえんだ！ それに今度は今日と違ってとんでもなく重要任務だぞ！ こんな素人連れてって仕事が失敗したらあんただって痛いだろッ！」

「今度——ああ、ミュラーニツヒ邸の夜会か……」

イスラークはレヴィの迫力など諸戸もせずいつものように涼しい顔で対応した

「いいんじゃないかなあ。ミュラーニツヒ邸は広いし、魔血衛兵はうじゃうじゃいるし……一人より二人で組んで任務に当たった方が効率がいいと思うけど」

「こいつじゃ余計非効率だッ！」

「そうかなあ……ザガロ、【死】の魔法以外で特技ある？」

その問いにザガロは一瞬言葉を詰まらせたがすぐに顔を上げイスラークに声をかけた

「一応、体術はおじいちゃんから習ってるけど——」

「ほら……これだけ出来たら合格点でしょ」

イスラークのその言葉にレヴィはすかさず言い放った

「それじゃあ答えになってねえよッ！」

「君、頭を冷やしなよ。ザガロは初任務なんだよ。先輩暗殺魔法士が手取り足取り教えるのが筋ってもんじゃない？」

「俺の仕事は昨日初めて人殺ししたヤツが入ってくる世界じゃねえ。そんなのを俺に押しつけられるのも迷惑だ！」

レヴィはそう言うとぶいっと窓から顔を背けた

それを見てイスラークはすこし馬鹿にしたような笑みを浮かべた

「ふうん……せっかくの後輩ができて少しはいつもの孤独な任務から解放されると思ったのになあ」

「……別に。俺は一生孤独でいいさ」

一生孤独でいい——その言葉を言ったレヴィの背中はどこか寂しげにザガロは見えた

だけど本当のレヴィの気持ちなどわかるはずもなく、彼はまた憤慨した様子でイスラークに食ってかかった

「ともかく、俺はもうガキのお守りなんてもうまっぴらだ！」

「レヴィ！」

強情なレヴィに痺れを切らしたのかイスラークは初めてその声を大きく荒げた

クライアント
「これは 依頼者 である僕の頼みだ！ これがどういう意味かわかるかい！」

「命令か……あんたの好きな言葉だったな」

レヴィはその瞬間体中から出していた怒りの炎をすっと胸の奥にしまい込んだ

そして踵を返すとまたバルコニーの端へと歩いて行った。

「わかったよ。あんたに逆らう理由なんて何もないからな……」

「ふん……最初からそうしとけばいいのに……」

そう言うとイスラークは蔑んだ笑みを浮かべレヴィの後ろ姿を見た

暗殺者と依頼者——ザガロはその力関係を見たような気がして少し心恐ろしい気分になった。

「相棒か——」

最後にレヴィはぼそっとその言葉をつぶやいた。

「まさか天涯孤独のこの俺にそんなものが来るなんてな……」

そう言い残すとレヴィはバルコニーから下の地面にひらりと飛び降りていった。

なぜだろう。その時、彼は笑ってた気がした。

9 運命の相棒

一人魔法騎士団本部を出たザガロはまるで夢遊病患者のようにおぼつかない足取りで石畳を敷かれた綺麗な道路を歩いていた。

彼のショックは大きい。人を殺してしまったのをきっかけにこんなことに発展してしまうなど想像だにもしなかった。

恩赦と見返り——ザガロの頭の中にその二つの言葉が渦巻いていた

【水】の偉い人によって恩赦を貰った自分は見返りに【水】の都合の悪い魔血を殺さなければならない。この【死】のチカラで……

断ればどうなるかわかっていた。きっとベアール家の者どもに着きだして自分を死刑台に送るつもりだろう。

でも、どちらにしろ死刑台は近くなったのは確かだ。暗殺魔法士として生きていくということは死刑台と隣り合わせで生きていくということなのだから

だけどザガロは堕ちてでもしぶとく生きる方を選択した。否、選択せざるをえなかった

まるで自分が生まれる前に敷かれたレールを走り出したかのようにザガロは進んでいく——暗殺魔法士の道を。

ザガロは深いため息をつきながら、石畳を踏みしめる。

これからどうしよう。墓地に戻ろうか——そう思っていたその時だった

「おい……」

その潜んだ声に対しザガロは心臓が飛び出るほど驚いた

ドキドキしながら彼は後ろを振り返る。

そこには闇に溶け込むかのようにその場に潜んでいた黒ずくめのレヴィが立ち尽くしていた。

「な……何？」

ザガロは顔を引きつらせてレヴィを見た

それに対し彼は表情を一つ変えずに赤く光る瞳でザガロを睨み付ける。

「お前、次の任務のことちゃんと理解してるのか？」

「え……」

レヴィにそれを言われザガロは少し顔に困惑の色を見せたが、すぐに怪訝そうな顔をしてレヴィをじろりと睨み付けた。

「ミュラーニツヒ邸を襲うんでしょ。それはイスラークにちゃんと聞いた」

「そう言う意味じゃねえよ。どういう場所で、どういう ^{ターゲット} 標的 で、どのくらいの警備が居るとか——」

「それは……」

レヴィの矢継ぎ早の尋問にザガロは思わず閉口するしか出来なかった

それを見て、レヴィは呆れたように深いため息をついた。

「まったく、イスラークは任務に対して舐めてやがるのか？ 命がけなのはこっちの方なのに……」

レヴィはイライラした様子でそうぶつぶつと呟きながら俯くザガロに近づいた

そして身長の高い彼を顔をのぞき込むように見て言った

「いいか、明日襲い込む予定のミュラーニツヒ邸。主は風の有力貴族リカルト・ミュラーニツヒ。そしてこいつの邸宅が贅をこらした大邸宅ってわけ」

「どれくらい広いの？」

「そうだなあ……確実にお前んとこの墓地よりかは広いかもな」

ザガロはその言葉を聞いて思わずぞっとした。

墓地より広い邸宅があるって言うことも驚きだけど、そんな場所をたった二人で襲うなんて——無謀すぎる。

「話は終わってねえぞ」

思わず注意力散漫になったザガロを見てレヴィは強い口調で言い放った

「その広大な屋敷で明日、重要な夜会が開かれるらしいんだ。集まるのは【火】と【風】の有力諸侯——まあ早く言えば、イスラッグたちが目の敵にしてる魔血ばかりってわけだけど、狙うべき^{ターゲット}標的は……」

そう言うと急にレヴィの口調が弱くなる。どこか言葉に強い迷いがあるような言い回しだった。

「ターゲットは……つまり……」

「もしかして、レヴィ……知らないの？」

ザガロのその一言にレヴィは思わずうっと声を詰まらす

どうやら凶星だったらしく急に彼は態度を変え腕組みして顔を逸らした

「——知らなくて悪かったなッ！」

怒ったような声でレヴィは一言そう言った。

それを見てザガロはクスツと思わず笑った。冷酷な暗殺魔法士だと思っていた彼にふと人間らしさを見たからだった

それを見てレヴィは居心地悪いようにムツとした表情を浮かべ一ツ咳払いした

「つまり俺はお前がイスラッグからターゲットの名前を聞いたのか知りたいだけだよ！」

その一言に対しザガロは少し困った表情を浮かべた。

それを見てレヴィは嫌な予感を覚えたのか少し怪訝な顔でザガロを見つめた

「もしかして……お前……」

「ごめん。僕もターゲットの名前知らないんだ」

その言葉に対しレヴィの顔がみるみる怒りに染まっていく

彼は大声で「はああ？」と言いながらザガロの肩を強く掴むと彼の身体を揺さぶった。

「ふざけるなッ！そこを突っ込むのが暗殺魔法士だろうがッ！」

「そんなこと言われても……」

「何だよ！文句があるなら言ってみろよ！」

そう言うとレヴィはザガロの身体を乱暴に突き放すと彼を睨み付けた。

それに対しザガロも乱れた衣服を直しながらレヴィをにらみ返した。

「レヴィはターゲットターゲットってこだわるけど、多分イスラークはそんなものにこだわってないんじゃないかな？」

「そんな クライアント 依頼者 居るわけ無いだろ」

「でもイスラーク言ってたよ。夜会さえ潰せれば狙うのは誰だっていいって——」

その一言にレヴィは態度を軟化させザガロのまっすぐな金色の瞳を見た

「誰でもいいって言ったのか？」

ザガロはその言葉にゆっくりと頷いた。

それを見てレヴィは急に深刻そう色を顔に浮かべふと考えにふけた。

「意味がわかんないな……普通誰でもいいから襲え、なんて暗殺者の仕事じゃなく物取り強盗の類の仕事だろ……それをこの俺に頼むなんてイスラークのヤツ何を考えてやがる——」

「レヴィ！」

ぶつぶつと独り言をつぶやいていたレヴィにザガロはその瞬間強い口調で言い放った

レヴィは驚いた様子でこちらを見る。まるで脅かさないでくれよと言わんばかりの顔で。

「納得したかな？ この任務のこと——」

「あ……ああ」

そう言うとレヴィは腑に落ちないながらも無理矢理納得させるように何度も頷いて見せた。

それを見てザガロはまたしても暗殺魔法士レヴィの人間らしさを垣間見たようで少し笑った。

「……何がおかしいんだよ」

レヴィは少し居心地が悪いように笑うザガロをじろっと睨んだ

ザガロはにやにやと笑いながら自分より背の低いレヴィを見下ろした。

「いや、君ってもっと残酷で人間っぽくないイメージをしてたから」

「はあ？」

「よかった。君とならこれからもやって行けそうだ」

ザガロはそう言うとレヴィに対しすっと手を差し出した

それを見てレヴィは思わず鼻で笑って見せその手を払いのけた。

「バカ言うな。俺はまだお前みたいな素人を相棒だなんて思ってないぞ」

「でもイスラークは先輩は後輩をちゃんと導いてあげてって言ってたよ」

「あいつは俺の苦勞なんか微塵も感じてない クライアント 依頼者 なんだよ！ ったく、こんなガキ押しつけられた俺はなんて——」

「ともかく！ レヴィとなら上手くやっていける気がする！」

それに対しレヴィはまだ文句を言いたそうな顔をしたがザガロの無邪気な笑顔を見て怒る機会を失ったようだった。

「ところでさ……」

レヴィは態度を切り返しザガロを鋭い視線で見つめた

「お前、これからどこに行く気？」

「——え？」

その一言にザガロは困惑の表情を浮かべた。

どこへ行く——そう言えば先ほどまでそれを悩んでいたはずだった。

だけど僕には行き場所は一つしかない。いつも暮らしていた墓地しか——

「お前、祖父さんがどうなったかまだ知らないだろ」

「……」

ザガロはその言葉に小さく頷くしかできなかった

——おじいちゃん。その姿を思い浮かべるだけで心が痛む

今頃どうしているだろう。ベアール家の連中に捕まってしまったのだろうか、それとも——

「一度、帰れよ」

レヴィはザガロに背を向けると一言そう言った

彼のことだ。きっと照れ隠しでそうしたのだろうけど、ザガロはそれを悟るほどの余裕など無かった

ザガロはコクッと大きく頷くと石畳の道路を走り出した。

そんな彼をレヴィは黙って見送るしかできなかった。

言えるはずがない。彼の祖父が殺されたなど――

10 覚醒

戻りたくなかったと言えば嘘になる。

だけど、ザガロの心の中でその場所に戻ることは事実を受け入れるということだった。

半日ぶりに戻ったディアルグレイ墓地——そこはひんやりとした夜の帳がおちいつものようにしんと静まりかえっている

だが、そこで長年暮らしていたザガロだからわかる大きな変化——まるで墓場自体がその喪失を嘆いているかのように風は唸った。

その静まりかえった墓場に足を踏み入れたときからうすうすは気づいていた。

自分の過失のせいで愛しき人がもうここには居ないと言うことを——

墓場の奥へ進む度、ザガロの金色の目から一つと二つ涙の雫がこぼれ落ちる

そして、その骸を目の前にした瞬間ザガロは覚悟していた衝撃で濡れた落ち葉の絨毯に足から崩れ落ちた。

「おじいちゃん……」

ザガロはこうなることは薄々感づいてはいた。感づいていたから余計真実を見せつけられるのが怖かった。

けどもう愛しき祖父はこの世には居ない。

魔法の刃で背中を貫かれうつぶせに倒れた彼の亡骸を見てザガロは悲しみの現実を叩きつけられていた。

どうして——どうしてこうなったの？

慟哭の声をを挙げながらザガロはただただその事実だけを責め続けた。

人を殺した自分は恩赦になり、自分を庇った祖父は殺された——そんなの理不尽だ。理不尽すぎる。

本当なら死ななくてもよかった人が命を落とすことほど悲しい事はない。

僕に……【死】のチカラじゃなく【生】の力があれば——

ザガロはギュッと右手を握りしめるとそうよく思った。

だがそう思ったって祖父は帰ってこないのに。

——その時だった。

ふと顔を上げたザガロは祖父の手に何かが握りしめられているのに気づいた。

何だろう——ザガロは硬直し始めた祖父の手からそれを取り上げた。

手紙だ——べったりと祖父の血糊で赤色に染まった白い手紙だった。

なんでおじいちゃんはこれを握って死んでいったのだろう……まるで誰かに当てた遺書の如く

その瞬間、ザガロはハッと何かに気づいた。そして大急ぎでその手紙を開いた。

「おじいちゃん……」

その手紙はまさしくザックがザガロに当てた遺書そのものだった。

【ザガロ——

これを読んでいるときはもうわしはこの世にはおらんのじゃろう。

わかっておる。お前が悲しんでいることも自分を責めていることも。だけど【死】は誰にでも訪れるもの。それに逆らおうなどしてはならぬ。

だがわしにはお前に言い残したことが3つもある。死ぬ前にちゃんと説明できたら一番よかったのかも知れないが、万が一のことを考えてこの遺書にすべてを託す。

1つは……お前の両親のことだ。わしにはラファエラという一人娘がおった。彼女は^{ネクロマンス}死魔法の天才だった。それ故に常に外敵から狙われ続けていた。

その時、ギルティスという下級貴族が現れ二人は恋に落ちた。わしは反対したのじゃが……ついにお前、ザガロが生まれたのじゃよ

だが、ザガロの乳離れが終わろうとした頃、急にラファエラとギルティスはわしの前から忽然と姿を消したのじゃよ。何が何だかわからず、わしは二人を捜した。そしてギルティスの居場所だけは突き止めた——だが、そこでヤツはとんでもない事を言った。

「ラファエラのチカラをこのまま眠らせておくのはおかしい！ 彼女は帝国のため働くことを選んだのです」

わしはこいつの命を奪ってやろうかと本気で思ったよ。結局はヤツもラファエラを付け狙う外敵たちと同じ考えで彼女に近づいたのだから。だがヤツはラファエラのチカラが間違った方向に使われないよう自分が監視すると抜かす——嘘か誠はわからぬがこれにはわしも折れて連れ戻ることを諦めた。

あの時ギルティスを殺してでもラファエラを連れ戻せばこんなことにはならなかったのかもしれぬ。だが過去を悔やんでももう遅い。

ザガロ——この手紙のとおりだ。お前の両親は確実に今も生きている。お前に残された使命。それは捕らわれた母を取り返すことだ】

「ギルティス——ラファエラ——僕の父さんと母さん？」

ザガロは必死で手紙を読んで行って生まれて初めて父と母の存在を知ったような気がした。

そしてその父と母は確実に生きていると言う——でもどこにいてどうやって二人に会えばいいのかザガロにはわからなかった。

2つめは我が一族に受け継がれたチカラの話。

もう知っての通りわしやお前には人の命を奪う【死】のチカラが存在している。だがそれと同時に我々【死】の一族は人の【生】をも自在に操るチカラが存在するという。それが我々の右手に封印された【サークル・オブ・ライフ 生の魔方陣】

これを使えば一度だけ死せる者に一度だけ命を分け与えることが出来る——しかし、その代わりに我ら自身の命を身代わりに差し出さねばならぬ。お前の命だ。使うべきところは考えて使え。わかったな】

「サークル・オブ・ライフ？」

そう言ってザガロはバンテージの巻かれた右手をじっと見つめた

そう言えば生前ザックは右手のチカラは使うなとザガロに再三注意していたような気がする

それは自分の命を分け与えて死した人を生き返してしまうからだからだろうか……

まだ手紙には続きがある。ザガロは2枚目をめくった

【3つ目——最後だが、生前出来なかった我々のチカラの英知をお前に分け与えようと思う。

唱えるのだ】

「ヴァル・ウル・ムジェ・アグウェ・クアット・ヴァイローガ……」

意味不明で謎の呪文を唱えるザガロ。だがその瞬間彼の表情が変わった

ひゅうううと冷たい風が吹き荒れたその瞬間、それは落ち葉を巻き上げる暴風へと変わった

足元に赤い光が走る。それは何かを描くように鋭角に動いていく。

現れたのは大きな逆三角形のあの魔方陣だった。

「何ッ？」

ザガロはいつもと違う感覚に混乱した。

それは人を死に追いやるものではなく、もっと別の質を持った強い結界だった。

まさか先ほどの謎の呪文で出来てしまった強力な魔法なのだろうか——だが、そんなことを考えているうちにみると魔方陣は強い魔力を発した。

赤い光が闇を切り裂く。

ちょうど中央にいたザガロはその光の渦に飲み込まれていく

両手を覆ったバンテージが破れ去りみるみるうちに消えていく

そして大きな魔方陣と共鳴するかのようにザガロの左手の【死の魔方陣】は赤く右手の【生の魔方陣】は青く光を放った

たすけて——も言えなかった。ただただその目眩くチカラを欲するかのようにザガロは無意識に両手を前に伸ばした

光はさらに増大する。まるでザガロにチカラ与えんが如く。

魔方陣から発せられるとてつもないエネルギーを吸収する事にザガロの身体はどんどん熱くなりそして皮膚が灼けるような感覚に陥った。

もういい、やめて——理性はそう思うが本能はそれを許さなかった。

やがて、ザガロは気を失った。

ガクッと地面に脚から崩れ落ちると、その瞬間彼を包み込んでいた赤い光も一気に潮を引いていった。

そして訪れるいつもの風景——

ザガロは再び夜の帳が落ちた墓場の真ん中でぐったり倒れ込んだ。

その腕から胸、そして頬にかけて禍々しいアザが青黒く浮かんでいく

眠りこける彼はまだ気づいていない。

そのアザが増えることが自らの封印されたチカラが解かれた証拠だということを——
最後に、祖父が残した手紙の終わり

【ザガロ。何があっても強く生き抜け——】